令和５年度第３回第１１期国分寺市立子ども家庭支援センター運営協議会

日　　時：令和５年 12 月９日（土）　午前 10 時～正午
場　　所：国分寺市立子ども家庭支援センター　地域活動室
出席委員：辻、髙橋、村松、佐土原、賀來、波田、岡本、三上、片岡、井原

会　　長：それでは、皆さんおそろいのようですので、第３回の運営協議会を始めさせていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。まずは、事務局から会議の成立状況についての確認をお願いします。

事 務 局：本日は出席委員 10 名、欠席委員１名、委員の過半数出席がありますので、国分寺市立子ども家庭支援センター運営協議会設置条例第６条第２項に基づき、国分寺市立子ども家庭支援センター運営協議会が開催できることを確認しております。以上です。

会　　長：ありがとうございます。それでは、開催定数が確定できましたので、改めて始めさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。

本日の議題は、前回に引き続いて、「子ども家庭支援センター地域組織化事業における父親支援の取組について」ということで議論を進めさせていただければと思っております。

うちも子どもを育てていて、子ども同士のつながりはあって、ママ同士のつながりもあって、じゃあ父親同士も飲もうかというと、父親同士はちょっと行くのが面倒くさいとか、なかなか父親同士となると子ども、母、父まではうまくつながらないみたいで、いろいろなつながり方があるのだなと実感をしておりますけれども、前回いろいろご議論いただいて、その資料をまとめていただいたものも事務局でご準備いただいておりますので、事務局から資料についてご説明をお願いいたします。

事 務 局：本日もよろしくお願いいたします。資料につきましては、本日事前にメールでお配りさせていただいたもの４点になります。机上にも置かせていただいております。

まず、資料 15 になります。こちらが、対象者別の課題を整理させていただいているものとなります。今現在、子ども家庭支援センター地域組織化事業で実施しておりますパパトーキングを、対象者別に当てはめて整理をさせていただいたものになります。また、下の表につきましては、皆様から前回ブレインストーミングで課題を出していただいた項目ごとをカテゴリーにさせていただいて、対象者別に、全ての方たちに対象になるものではあるのですが、特にこの対象者についてはこの部分が必要なのかなというところでの課題の整理をさせていただいているものとなります。

資料 16 になります。こちらについては、前回、子育てに参加する中での困難と孤立と家庭内外のところでの意見をそれぞれのカテゴリーに整理をさせていただいております。点線囲みでそれぞれのところに記載をさせていただいているものは、現在、市の中で実際に行われている事業を記載させていただいているものとなります。

続きまして、資料 17 になります。皆様のご意見を踏まえまして、答申案です。素案になります。たたき台になりますので、こちらを基に皆様これからご意見を頂けければと思っております。対象者をどこに焦点を絞っていくかというところも含めまして、本日議論いただければと思っております。

最後の資料 18 になります。こちらは、高齢者のほうで地域組織化という視点で見たときに多世代への取組というところでどういったものがあるかということで、高齢のほうで行われている事業について参考資料としてお出しさせていただきました。

以上、４点になります。資料の過不足は大丈夫でしょうか。それでは、よろしくお願いいたします。

会　　長：ありがとうございます。答申が第４回に確定をさせるというスケジュールで、次回はあらあらの骨子をベースに細部調整というようなイメージで、今回、議論としてはしっかり深めていただいて次回につなげていきたいというところでございます。

この「おれんじｃａｆｅ」の資料については、私から事務局にお願いをして、前回まで割と年代が水平のところで交流のイメージがあったので、もう少し縦というか、世代を上下にとってみての交流の場というのはどういうものがあるのかなということでご準備いただいたものでございます。答申案、あるいは資料の 15、16 におまとめいただいているものを含めて議論をしていきたいと思います。

前回から３か月ですか。かなり長い日がたっていまして、記憶をたどっていくのもちょっとしんどいところもあるかもしれませんが、ぜひよろしくお願いしたいと思います。

副 会 長：資料をお出しいただいているこのおれんじｃａｆｅについて、ちょっとお伺いしても大丈夫ですか。

会　　長：お願いします。

副 会 長：これは国分寺市の事業ということで、実際これは高齢の方だけではなくて、広い範囲で呼びかけられているのですけれども、子育て中のお父さんみたいな層も参加されているかというのはお分かりになりますかね。参加者が実際どのような感じかというのを。

事 務 局：実際は、認知症のご家族がいる方々が中心というのは聞いています。

副 会 長：じゃあ、そこに関わるお父さんが出てくることもあるかもしれないくらいの。

事 務 局：そうですね。

副 会 長：ありがとうございます。

会　　長：ちょっと事務局から答申案の骨子というか柱建てについてもう少しご説明いただいてよろしいですか。ざっとでいいので。

事 務 局：では、答申案の説明を簡単にさせていただきます。カテゴリーとしては、答申案ということで、まず課題について項目立てをさせていただいております。こちらは協議会で出された課題について記載させていただいて、状況の確認という形になります。２枚目の裏面になりますけれども、（２）として、「対象とする父親について」のところを焦点にして、全ての父親というところではありますけれども、地域の中での取組が行われている中で、子ども家庭支援センターは、どこに焦点を当てていくのかというところで、（２）ということで「対象とする父親について」ということで項目立てをさせていただいております。

その内容を踏まえまして、３枚目の表面の下のほうから裏側にかけて、「子ども家庭支援センターが担う父親支援について」というところで最後にまとめていただきたいというところになります。

「結びに」というところは、そこも踏まえまして、子ども家庭支援センターとしての父親支援の在り方とか社会情勢を踏まえたりとかして、ご意見を最後に結びにということでさせていただくというようなつくりにさせていただいております。

会　　長：ありがとうございます。課題の整理で、資料 15 との対比で見ていただければと思いますが、経済面とかあるいは労働環境については、国とかあるいは都との関係が強くて、子ども家庭支援センターとして課題としては認識しながらもそこにアプローチするというよりも、やはり地域というのを念頭に置きながら、相互の関係性をどういうふうに作っていくのかというところが主軸になろうかなと思います。

これまでの議論を踏まえると、子育てに関わっていない層、あるいは関わり方が分からない層、あるいは積極的に出てこられる方、いろいろあるということで、それぞれに応じたアプローチの仕方があるだろうということでおまとめいただいているところでございます。

私も学生との授業の中で、どうしたら父親とつながれるかなという話を学生に考えてもらいました。やはり考えることは似ているなと思ったのが、運動会とかアルコールがあるといいのではないかというのが共通していましたね。これはいい意見だなと思ったのが、パートナーからの手紙ではなくて子どもからの手紙を書いてもらったほうが来るのではないかと。パートナーから行けよと言われるよりも子どもから来てねと言われたほうが行きやすいのではないかな、とっつきやすいのではないかなという意見がありました。なかなか出て行

きづらいというか、最初の一歩をどう踏み出せるか。その仕掛け作りを含めてご意見を頂戴できればと思いますが、いかがでしょうか。

委　　員：ちょっと感じたのが、今ある媒体が、例えばここに来ているお母さんたちが、パパトークがあるからというのをパパに伝えるとか、市報をママが読んで父親にこういうのあるよと言って、だからママを介してしまうというところがやはりあるのかなというので、何かどうにか父親に直接届くような媒体があったらいいのではないかなと思いました。どうですかね。実際にお父さんは何を見ていますか。

委　　員：何も見ていないですね。

委　　員：インスタグラムとかも見ていないですよね。

委　　員：自分は、もう妻がぶんちっちに来たりとか、児童館に行ったりとかしているので、その話を聞くだけですね。様子は、本当に妻から聞く情報、市報もうちは珍しくちゃんと読んでいるのですけれども、本当にそのぐらいだと思います。

副 会 長：母子手帳アプリが導入されて。それはお父さんお母さん両方とも登録ができる。

事 務 局：登録は可能です。

副 会 長：そういうものが直接届くことで、お父さんは見られるようになるし、見るようになるのかどうか。そこの充実をしていくという方向があるのかどうか。

委　　員：アプリも、本当に２人とも必ず登録するというのだったらいいですけれども、どうしてもお母さんだけが登録しているというのが多いのかなとか思いますよね。

委　　員：私も同じ意見を今日お話ししようかなと思っていて、なかなか情報を取りにいくという意識がないと行かないので、うちの主人が話していたのは、年代別に行ける場所とか会とかは変わってくるので、母子手帳アプリに自分の子どもの年齢を登録しておけば予防接種の通知が来たりとかあるので、そういう感じで年齢を登録しておくことでその年代に合った何かイベントがあれば通知が来るような仕掛けがあれば、自分から情報を取りにいかなくてもお知らせが来る、そういったアプリがあると、情報発信としてはいいのではないかなと思いました。

会　　長：情報はどうやって入ってきますか。

委　　員：うちは結構自分から取りにいくことが多いですね。

会　　長：どういったところに取りにいかれますか。

委　　員：やはり結構ネットですね。ネットでやはりそのとき欲しい情報を取りにいくというのが多くて。でも、取りにいかない人はやはり取りにいかないというのはありますよね。

　予防接種に関して言えば、結構スケジュールが複雑ではないですか。だから、自分のときはどうしたかというと、ガントチャートは分かりますか。ガントチャートというスケジュール管理をするツールがあるのですけど、それでこ

この予防接種を受けた３週間後はこの予防接種だからみたいな表を作ったりとかして管理したりはしていたのですけれども、それをじゃあほかの人が積極的にと、あまり積極的にやるとは思えないかなと。

ただ、父親にとってこれは何か一緒にやろうかなと興味が湧く目標みたいなのができるといいのかなとは思います。例えばスポーツでも勉強でも何でもいいとは思いますけど、何かそういうスポーツの教室の初心者体験みたいなのがあると、小学生ぐらいだったら多分そういう初心者体験みたいのがあるから一緒に行かないかみたいなのがあると比較的行きやすいのかなとは思いました。

会　　長：情報発信をするときに何かうまいことやるとか、何か工夫されていることはありますか。

委　　員：情報発信をするときにうまいことやる。言い方１つでその人が関心を持ってくれるかどうかというのは大分変わってくるのですよね。なので、やはりいかに興味を引ける言い回しを考えるのかですかね。関心を持ってもらわないと、人というのはどんなアイデアとか情報が来てもスルーしていってしまうではないですか。なので、そこをキャッチするキャッチーな言い方とか。

会　　長：そうですね。メーリングリストは基本的にスルーしていきますね。学童保育の何か事務的なメールとか、いいやと思ってスルーしてしまいます。

委　　員：小さい子でも、やはり発達障害のある子というのはすごく自分の興味のあることにはこうなるけれども、そうではないことはスルーで「要らない、やらない」となってしまうので、どれだけその子の興味のある言い回しに近づけるか。関連を持たせて、「これだと、こうでこうで好きなものと絡んで楽しくなるよ」みたいな盛り上げ方ですかね。

委　　員：アプリではないのですけれども、ここに「関心があり地域とのつながりにも意欲的な方は今後もリーダー的な存在として活躍してもらいたい」と書いてあるのですけれども、うちの夫がパパトーキングに参加させていただいた後にＬＩＮＥグループができたのですけれども、やはり夫が言っていたのは、リーダー的な存在がいて何か情報を発信してくれたらじゃあみんな行こうかとなるけど、そういう人がいないとなかなかみんなつながらないなと言っていたので、やはりＳＮＳとかでもグループを作るときにリーダー的存在は大事なのだなと思ったのですけれど、今いないということなので、それまでつなぐ何か仕掛けがそういうアプリとかいろいろな言い回しとかで必要なことだなと感じました。

委　　員：ムードメーカーが１人いるとみんなで盛り上がれるという感じですかね。

副 会 長：そういうリーダー的な方がフラットに集まった中から自然発生的に出てくるのか、何となく市のほうで意識して養成とまではいかないですけれども、意識的に配置していただくというのは２つあるのかなと思うのです。なかなか自然発生的だと、継続的に続くかというところとか、負担感とかそういうのも出てくるかなと思います。

委　　員：もともとの話なのですけれども、この父親支援を何でするのかというところをもうちょっとはっきりさせておかないといけないのではないかなと思っていて、この答申の一番最後のところには「子どもの虐待予防につなげる」とあるのですけれど、そこの目標がピンポイントにならないと、今４つに分けてもらったグループのどこの層に。関心がない人に関心を向けさせるという方向なのか、それとも関心があるけど困っている人に情報をあげるという方向なのか、最終的なゴールが虐待を減らすことだったらその虐待がある家庭の様子なんかを聞いておかないとイメージが湧かないのかななんて思ったのですが、そういうのは多分子家センさんはいろいろな情報をお持ちだとは思うのですが、何のために父親支援をやろうというのかをいま一度はっきりさせておいたほうがいいのかなと思いました。

委　　員：これは答申の最初に、近年父親の産後うつが増加している背景があると。やはりそこに主眼があるのですかね。

委　　員：それならそれでと。大分違いますよね、産後うつに対する対策なのか、虐待を減らすことなのかで。

委　　員：結局、虐待を減らすことにつながるみたいなことになるのだろうと。

委　　員：そこを、市の最初の要請がどういう形なのかもしれないですけれども。何のために父親支援をするのかというのは。

事 務 局：最初の第１回の資料で、成育医療センターの研究とかでやはり男性の産後うつも、あるとか、そこへの支援が必要だという国の資料をお配りしましたが、子ども家庭支援センターでも、10 年前と比べて、コロナの時期も挟んでいて、やはりお父さんたちが在宅ワークなども増えたりして地域にいるようになりましたし、それから、（育児に）参加したい、参加しなければいけない、しようというような時代の変化は、女性の社会進出も進んでお母さん側も仕事をする人が増えて、結果的に育児の担い手としてお父さんが参加しないと回らないところもあるので、大分育児に関わる人たちというのは増えているのはあるかなと思うのですね。育児休業の制度も、少しずつ国のほうも変わってきて、市の職員も男性の育児休業をかなりの人が、まだ短いですけれども数週間から数か月取る方も増えてきているような状況です。

その中で、今、パパトーキングの事業をやっていて、コロナもあって人も前ほど定着しなくなり少なくなり、前はグループになっていたけれども、それも何か今うまくできていない。父親の支援は、やはり育児に参加したりする比重も増えてきているし、頑張ろうとしている人も増えてきているのに、うまくうちの事業に関われていないのではないかというところがもともとのきっかけでした。地域支援というところとか、組織化といって地域で仲間づくり、交流をして地域で子育てをしやすくするというのは子ども家庭支援センターの仕事の１つなので、それをお父さん、男性の方に向けてもしたいというところが

あって、今回パパトーキングという事業をやっていることを題材にこのテーマでやってもらいたいというのがありました。

先ほど委員からもおっしゃったように、産後うつの改善とかそういったことがゆくゆくは虐待予防というところなのですけれども、ちょっと虐待予防というと何か大きくなり過ぎてしまうので、父親への育児支援と、それから地域で子育てをしやすくするために特にお父さんたちにどうしたらいいかというところを今回考えたところです。

ですからもしかすると、最後のところに急に虐待と書くのは何だかちょっと表現としては修正が必要なのかもしれないなと今、お話を聞いて思いました。

委　　員：そうすると、こっちの資料でいうと、この一番右端の人というのはあまりそれに当たらないのかなと思って。多分、関心がなければ産後うつにもならないだろうし、そうすると、この真ん中２つのグループの人たちの、その人たちのどの問題を解消する対策をするのかみたいな感じになるということですかね。

事 務 局：そうですね。対象を分けて答申案に文章を作っているときに、結局１か所だけにアプローチするというよりは、結果お母さんに行けと言われたかもしれないけれども、関心がない人も来ると思います。絶対に行きたくない人は来ないと思うのですが、行ってきてくれとか行くべきだと言われて。結果、そこでいい体験ができると、その後保育園でのお父さんたちとのお付き合いにつながったりとか、小学校に入ってＰＴＡとか地域のそういう自治会のお祭りとかに参加したりとか、そういうきっかけにもなるのかなと思ったので、この対象の、一番全然関心がない人への働きかけはパパトーキングではなくてもっと広報周知的なものなのかもしれないのですけれども、全然対象にしないということもないのかなと作っていて考えたところです。でも、ぜひご意見を頂けるとありがたいです。

会　　長：ありがとうございます。一昔前と比べて、恐らくおっしゃっていただいたように子育てに関わる父親の状況というのは大分変わってきているのだろうなと思います。うちも、学内で私より 15、16 歳上の教員と話していて「保育所に行っているんだ」と言ったら驚かれました。「あっ、行ったことないんだ、この人」と思って、ちょっとそれはギャップの大きさにびっくりしましたけれども、恐らくそういうことがいろいろなところであるのだろうなと思います。

ただ、その関わり始めて見えてきた問題が、この産後うつとかそういった課題が新しく出てきているのだろうなというところだと思いますけれども、地域でというのがやはり子ども家庭支援センターとして関わっていくキーワードになるのかなと思っていて。対象としては広く、虐待予防というよりも子育て困難の解消とか孤立化というかそういったところ、孤立予防みたいなところですかね。そういったところが１つと、あるいはこれから子育てを展開していく

に当たっての見通しを持ってもらうというか、そういったところも子育ての楽しさの共有とかそういったところもあるのかなというイメージでした。

そういったことを考えると、今、国分寺市は地域割りみたいなものはやっていますか。市内を幾つかに割って何々エリアとかと。

事 務 局：全市で１地域というふうに見てはいるのですけれども、一方で、高齢者のほうの地域包括支援センターというのが、今、６か所あって、その地域包括支援センターは高齢者だけではなくて地域の困り事とか、あと高齢者の相談を入り口にして、結果、子どもの相談も入ってきてしまったりということもあるので、６で考えるという考え方も市の中にありますが，今はっきりとはないです。

会　　長：なるほど。拠点は３つに分かれているのでしたか。

事 務 局：親子ひろばの拠点というのが、中央線の駅で国分寺駅エリア、西国分寺駅エリア、国立エリアということで、縦に東部地区、中央地区、西部地区という形で分けてはいます。

委　　員：何で恋ヶ窪が入っていないのですか。立派な市の中の駅なのですけれども。

会　　長：やはり西武線では弱いのではないですか、中央線に対して。

事 務 局：そういうことではなくて、分けやすいエリアというところで。恋ヶ窪は中央に入っておりますので。

委　　員：恋ヶ窪住民として、中央だと言われても西国まで行けないのですけど。

事 務 局：市の中心ですから、恋ヶ窪は。なので、中央だと思います。

委　　員：地域で分けるお話なのですけれども、この運営協議会に参加させていただいたときに、親子ひろばが小学校区ごとに１つずつあるというお話を伺って、それがすごく理にかなっているなというのが実感としてありまして、私も親子ひろばに通っていたのですけれども、３歳ぐらいまで通って、幼稚園、保育園にみんな別れるのですけど、また小学校になったときに、また学区ごとになるので同じ小学校で、そこでお母さん同士が会ってすごく懐かしかったり親近感があったりしてつながっていけるので、すごく学区ごとに何かしていただけるということは理にかなっているなと思いました。

この課題の９番の地域とのつながりのところに対応するお話になるのですけれども、やはりパパ支援も学区ごとにしていただくことによって、小学校に行ったときにお父さん同士が会って、また関係性が継続していくきっかけになるのではないかなと思いました。

学校ボランティアとか保護者のボランティアでお手伝い行くことがあるのですけれども、男性とかがちらほら来られていて、決して浮いているとかいう感じでもなくなじんで一緒に参加してくださっているので、これからそういうふうに最終的にはパパ、ママ関係なくやっていけたらいいなと思うのですけれども、先を見越してのつながっていける支援が地域ごとにできるといいのかなと思いました。小学校区で難しかったとしても、中学校区で青少年育成委員会

というのが中学校区ごとにあるという話なので、そういうところにつなげていくということもありなのかなと思いました。以上です。

会　　長：ありがとうございます。

副 会 長：先ほど委員から提案いただいた対象をどうするかという話で、私も初めにこの答申を頂いたとき、産後うつという言葉なんかが入ってきたりしたので、どっちかというと、ちょっと関わりたいという意欲はベースにありつつ、困り感を持って、パパトーキングも継続しなかったみたいな人を、どうお父さんをサポートするかみたいなイメージで話をしていくのだろうなと思っていたのですけれども、課題を前回とかに抽出したときに、そういうお父さん像もありつつ、やはり関わってくれないとか、子どもの発達をよく理解しないまま家の中にいるお父さんの存在とかも出てきたというところで、なかなかそこを今回横に置いたまま話をしていいのかなという気持ちも正直あるのです。

なので、この答申案の中で分けてくださったように、関心がある・関心がないとかそういうのをちょっと意識しながら、基本的には多分初めの答申の想定していたようなこの真ん中辺りくらいの、資料 15 でいうと関心があるであったりうっすらあるような方々の困り感というところがメインというか主題になりつつ、やはり全く関心がなくて関われないお父さんをどうやって引き込むかみたいなものも、後ろのほうでというか、我々が考えたことを少し提案していくという形もありなのかなと思っています。

それこそさっき言った母子手帳アプリだけでは届かないお父さんみたいなのもいるとは思うので、逆にそういうのが効く人にはどういうものを届けるかということと、そうではないお父さんに子ども、お母さんの要望、ニーズとしてどういうものをどういう方法で届けるかみたいなそんなところも、ちょっとみんなで議論して載せていくということでもいいのかなと思っています。ただ、本当に真ん中に絞ってしまうというような考え方もあると思っているので、ちょっとその辺りはどうするかというのを皆さんで一致できたらいいなと思います。

お父さんについて考えるというのがちょっと新しかったので、どうやって進めていくかという中で皆さんの意見をたくさんお聞きする中でいろいろ見えてきたところがあって、とても大事だなと思っています。

会　　長：今回、この資料 15 でお出しいただいたものだと、やはりエクセルなので線で区切られるのですけれども、イメージとしてはもう少し円が重なっているようなイメージというか双曲直線上の線の区分がないような、少し重なりつつあるというようなイメージのほうがあるのかなというのと、あと横の広がり、子育てに対する意識と抱えているしんどさみたいなもの、そういったものも軸として設けて考えていく。家庭の中外みたいなものもあるし。

委　　員：１から 10 まで課題がある中で、どこにだったら言っていけるのかというところが。夫婦関係には多分入り込めないのだろうなとか、そうすると焦点化がもうちょっとできるのかなと思ったのですけど。

委　　員：パパトーキングが活性化されてきた頃、すごく盛んだった頃というのは、パパトーキングというのはどういった内容を話されていたのでしょうか。中身を教えてもらっていなかったというあれですね。

委　　員：具体的に誰がとかいう話はしないように、ざっくりとは聞いていたのですけど。

委　　員：どんな内容でパパトーキングは盛り上がっていたのでしょうか。

委　　員：一番男性ならではだなと思ったのは、やはり具体的な情報というか、こういう遊び場所があるとか、ららぽーとの靴屋さんに行ったら足のサイズを測る機械があって便利だよとか。じゃあそこ行ってみようとはりきってうちの主人も連れて行ってくれたのですけれども、何かそういう情報交換とかが一番多かったのかなと。

あと絶対出る話題としては、ママとの価値観の違い。ママとの意見が違ったときに、自分が我慢するしかないのかみたいな。そこに日頃ママは育児ですごくストレスを受けているのに、違う意見を自分が言うことによってママが余計ストレスになってしまうのではないかというのは絶対に出る話だということ。あと、夫婦の関係の悩みがたまにあったりという。どうでしょうか。

委　　員：子育てを話題にしても、やはり結局夫婦関係みたいなそういう話に。

委　　員：どうしても今ママ中心の育児なので、もしかしたらコロナ後で変わってきているかもしれないのですけれども、夫が言っていたのはコロナ前なので違うかもしれないですが。

委　　員：さっきもお話が出ていたのですけれども、今まで地域を全然知らないお父さんが主導的に動いて継続的に活動や何かに結びつけるといったら、やはり目的がないとなかなか参加しにくい。さっきのお話の対象をどうするかというところが幅広くなってしまっているということがあるのですけど、うちの広場に来ていただいているパパに何人かお話を聞いたのですが、誰かやはりパパと会いたいというのはすごくどの方もおっしゃっていて、「じゃあ、こういうパパトーキングありますよ」とか、うちだったら「土曜日こういうイベントをやっていますよ」と紹介したりしてつなげていくという形なので、皆さんそういう知り合いたいという要求はあるのですけれども、ただ女性との違いが、育休がみんな決まったときから始まっていない。その人その人の取るところから始まって、取っている期間もその人その人でバラバラなので、例えば自分は育休で来ているけど、同じような人とどこに行けば会えるのかというのがまず分からないし、子どもの月齢も同月齢の人に会いたいという方もいればちょっと上の人とお話ししてみたいという人もいるだろうし、なかなか絞りにくいというのは正直あると思うのです。まず目的。対象がどこであろうが何かの目的があってそれを

届ける術があれば、そういう母子モのように、大方女性が見ると思うのですけれども、それが父親限定的なものもあると、例えば５、６か月の人にはこれが届くとか、７、８か月になったらそういうのが届くとかで、何かに参加できるものが全員に分かるみたいなので、さっきおっしゃったように校区で分かれるとかしたら、もうちょっと先につながっていけるのかなとは思うのです。

委　　員：それは、子どもの月齢を例えば市が把握していて、それをパパのメールか何かに届けるということですか、そうではなくて。

委　　員：アプリに生年月日を登録するとその月齢の。

委　　員：こんなアプリがありますよという紹介を出すのですか。どこに出すのですか。どういうメディアを使うのですか。

委　　員：それがアプリというのも、そういうＳＮＳが得意な方だったらそれでもいいし、例えば今お話が出ているパパトーキングを５、６か月の人とか、例えばもっと目的を明確に、体を使える月齢のパパ集まれとか、何かぼやーっとしたやつでどうぞ来てくださいと言ってしまうと、じゃあゼロの中でもゼロと言っても11か月まであるからみんなバラバラなのですよね、成長が。物すごく成長差が大きい時代だから、来てくれた方が言っていたのは、自分の家の子どもはちょうどご飯を食べる時間に当たってしまってぐずって泣いてしまって、じっくりお話が聞けなかったという方もいたので、そういう人は離乳食の話を聞きたいだろうし。

委　　員：趣旨はすごくよく分かるのですけれども、情報の出し方、届け方。個人情報も関わるだろうし。それは誰がどうするのが一番なのかというのがよく分からないです。

会　　長：母子モでしたか。

事 務 局：母子手帳アプリというのがありまして、妊娠届を出したときに登録していただくと、お子さんの年齢，町名を登録していただくのですけれども、市側としては，子どもの月齢で対象者を絞ったり，町名を絞って発信することは可能になります。母子手帳アプリのほうは、先ほど委員がおっしゃっていました予防接種のスケジュールも管理ができるようになっております。また健診の知らせ、予約も母子手帳アプリの中でできるようにだんだんなってきています。

委　　員：それは父親も登録できるのですか。

事 務 局：できます。

委　　員：できるのですね。

会　　長：それの紹介は保健師面談のところでやりますか。

事 務 局：はい。妊娠届のときにご紹介をさせていただいております。

会　　長：ということは、基本的に来るのは女性。

事 務 局：そうなってしまいます。一般的にはホームページではご紹介しているのですけれども、直接個別にとなると女性が多いということになろうかと思います。

委　　員：父親が登録している人は少ないですよね、推測ですけれども。

事 務 局：今現在，父親がどのくらいの登録されているかというのは、把握はできておりません。

会　　長：そういうアプリを普及していくというのも、１つの手段ではありますよね。

委　　員：名前が「母子モ」なのですよね。父が入っていないですものね。

事 務 局：そうですね。

委　　員：そもそもがね。

委　　員：対象外にして作られたかなと思ってしまいますよね。

委　　員：今、多様な方々、シングルの方もいらっしゃるし。

事 務 局：「ぶんじ子育てナビ」というのですけれども、アプリのところの名前だと母子手帳アプリになっています。

委　　員：母子手帳か。

会　　長：その名称を変えようというのも国の中では少しずつ議論にはなっていますけど、まだそこまで変えるには至っていないですね。確かにそう言われてみれば、対象外ですね。

委　　員：母子手帳とかもそうですけれども、確実に父親が関われないところはあるから、赤ちゃんを産めないし、おっぱいもあげられないし、そこはある程度線引きはある必要があって、お母さんが主導していなくて父親が主導する子育ては多分あり得ないと思うのです。ある程度の年齢になってからはあり得るかもしれないけど、スタートは絶対にお母さんから始まるわけだから、そこをあまり男女平等みたいな意味合いで始めてしまうと、それこそいびつになって、それが男性の産後うつとかにつながっているのではないかなという気もします。ある程度諦めというか、引き際が肝心というか、そんな気はするのです。

委　　員：産後うつに男性がなる大きな要因というのがちょっと想像がつかないです。前の資料だと、ちょっと見落としていると思うのですけれども。

事 務 局：以前にお出ししましたアンケート調査、産後うつの要因はなかなか読み取りづらい部分ではあるのですけれども、お母さんですとホルモンのバランスとかあるかと思いますが、お父さんの場合はやはり不慣れな子育て、お母さんとの関わりというところで、自分が一生懸命やってもなかなかそれを認めてもらえなかったり、そういうのが続いていくことで、子どもが生まれてから１年間の中で、６割ぐらいの方たちがその課題を解消できていない状況にあるという調査結果にはなっています。

　あと、地域に出たことがない人たちがいきなり地域で子育てというところも課題ではあったりします。

委　　員：この認知症の方の広報とかチラシを見て思ったのですけれども、やはりお父さん方は自分が今モヤモヤしていることが、これが支援が必要なことだとはつながっていないと思うのです。でも、こういうチラシは認知症の方としっかり対

象者が書かれていて、ですから認知症の人は自分だという認識ができるわけで、だからそういうパパトーキングみたいなふんわりしたチラシではなくて、私たちが前回挙げたような結構生の意見、こういうことで困っている方、こういうことで悩んでいる方みたいのをしっかり書いた、対象者がはっきり書いてあるチラシというのにするのも必要なのかなと思うし、それを公の場にボンと置いてあるだけではなくて、もしできるのであればもうお父さん宛てにお手紙を郵送するということができたらちゃんと届くのではないかなと思いました。その内容も、やはりお母さんたちみたいに集まってフリートークしましょうという会ではなくて、ちゃんと専門家が来て「じゃあ今、悩んでいることを解決できます」という目的が達成される会というのをしっかり設けた会にすると、目的を持っていらしていただけるのではないかなと思います。

委　　員：確か女性が妊娠したときに参加したことがあるのですけれども、妊婦体験会みたいなお腹が実際大きくなって動くとか、沐浴の体験会みたいなのをやったのを思い出したのですけど、そこで、例えば夫婦の価値観に関する違いというのは結構こういう問題が過去の先輩の事例だとありますよとか、こういう細かいところで悩んでいる人が多いですよみたいな、そういうのを時間の中で割り込ませることができると、そういう産後うつとかの男性の予防にはなるのかなと思ったので、そういうのを入れてみたらどうかなと思いました。

会　　長：そういうツールなのかブログみたいなものを行政が管理するというのはあり得るのですか。体験談みたいなものを蓄積していくというか、両親学級とか父親学級でこうだったああだった、そこから何回か投稿してもらうというようなものを行政が管理するというのはあり得るのですか。

事 務 局：今、委員がおっしゃったのは多分両親学級を保健センターでやっていて、そこはかなり夫婦でもうほとんどパートナーとペアでいらっしゃるのですね。そこの中で、現在のやり方がもしかしたらちょっと違っているかもしれないですけれども、男性と女性にグループを分けて、地区も確か半分ぐらいに西と東とかに分けて、なるべく近い町の人と話せるようにと昔はやっていたのです。今はちょっと分からないのですけど、そういうところでここで前回挙がってきた課題とか、こういうリスクがあるということを何らか盛り込んでもらうということは検討できるアイデアなのかなと今、思っていました。ただ、何かそれを媒体とかアプリみたいな感じで管理というのは、ちょっと今はあまり想定していないのですけれども、ツールだと何ですかね。母子モとかホームページとかXなのか。

会　　長：そういう投稿先みたいのがあると、自分で作るよりもやりやすいのかなと思ったりもしました。

事 務 局：皆さんに入れていってもらえる感じですかね。

会　　長：そうです。体験談みたいな。

事 務 局：先ほど両親学級のお話が出たのですけれども、年に２回ですが，市内の親子ひろばで健康推進課とコラボで、プレママ・プレパパセミナーをやらせていただいております。そのときには先輩パパ・ママにそれぞれ来てもらって、交流する会をその場でも設けさせていただいています。

副 会 長：この間、幾つか出たのが、いわゆるみんなこういうふうに困っているのだよということを、それこそチラシの郵便だったりとかそういう会の差込みだったりとか媒体は何でもいいのかなと思っているのですけれども、そういうのを増やしていく。それこそ市の管理できるようなところでパパが閲覧できる特設ページみたいなもので、そこでこんなことでみんな困っているのだということを提示していって、ある意味自分だけではないと、外に出て行くともっとこういう話ができるかもしれないというような思いを持ってもらうというのは、方法如何はありますが大事かなと。

委　　員：地域とつながるという目的が、一般の人たちが子育てして仕事もして忙しい中で優先順位になかなかこない気がするのです。だから、結果として地域でつながることが目的だけど、そこは大きく目標としては出さずに、しっかり育児とかパートナーシップの知識が得られるよという目的にしたほうが、結果こっちにつながるのかなと思うのですね。地域の人とつながろうみたいな感じだと、ちょっともう疲れていて行けませんという感じになってしまうと思うので、何かそんな気がします。

副 会 長：地域の人とつながりたいなと思っているかどうかというと。

委　　員：どうなのでしょう。

委　　員：地域によってつながりたい。

委　　員：共働きでどこまでその余裕があるかなとちょっと思ってしまいます。

副 会 長：家のことがスムーズになるようなことがとっかかりになって、それが地域とのつながりに結果的になるみたいな。

委　　員：あくまで一番小さい社会である家庭内に余裕がないと、地域でつながりたいとまではちょっといけないのかなという気はしますが、どうでしょうか。

委　　員：でも、逆に近所の人とのつながりができたほうが子育てが楽になってということもあるのですよね。近所の人が助けてくれたりとか。ニワトリが先か卵が先かではないですけれども、どっちとも関連して高め合っていくものなので。

委　　員：多分それはそうなのでしょうけど、そこまで持っていくのが大変かなと。私自分自身のこと、もう 20 年も前のことを振り返ると、やはり地域に出ていくのはエネルギーがすごく要りますよね。それこそ自分とか家庭に余裕がなかったら、地域に出て行くあれもない。今だとそういうことはネットになるのかなと。家の中でちょっとすき間時間とかでもできるので、ネットのほうに行くかなという気はするのですよね。外に出て行くよりはエネルギーが少なくて済むのでね。やはり、だから今の時代、特に若いこれから子育てをするような人たちな

んかだと、ネットを使った何かというほうが入りやすいような気はしますけれどもね。

委　　員：少し前だと、恐らく地域でつながっているとちょっとの間子どもを預かってもらえたりとか、何かしら実際に助かることがあったと思うのですけれども、今それが復旧してこない気がするというか。今、じゃあ地域とつながったところでちょっと子どもを預かっていてというような社会になるのかなという気はしてしまうのですね。そうなれたら、きっと育児は楽になるのでしょうけれども、なかなかやはり。

委　　員：地域というのが、さっきおっしゃったように近所の人であったり、私たちみたいな親子ひろばであったり、そういうものでも地域なのですよね。だから、親子ひろばに行くというだけでもそれは地域とつながるということになると思うので、多分、子ども家庭支援センターのほうでも、何か目的とかを見つけていただいて来てもらいたいというのが大きい。そこがもう地域につながっていると考えてもらえるのではないかなと思うのです。多分、月齢的に、今の親子の方は本当に１年未満のお付き合いでみんな保育園に行かれる方がすごく増えていて、本当に期間が短い間に私たちもどう関わろうか、どういう支援があるとかそういうのをお伝えするというのを、どういった方法でやろうかというのが物すごく大きな課題にはなっているので、それがＳＮＳだったり来てもらった方には直接お伝えするなり、掲示で貼るなり、いろいろな方法を使いたいと思っているので、最初におっしゃっていたように、プレパパ・プレママのときにはほとんど皆さん２人で来られるのです。本当にご用のある方以外は皆さんパートナー同士で来られるのに、なぜかその次の親子ひろばとかになると１人になっている。ただ、きっと一緒にできるのに、参加したいとかというご意見も多いので、何でそこで来なくなってしまうのかな。それは、そういう学級があるのを知らないのから来ないのか。

会　　長：耳が痛いです。

委　　員：でも、やはり産前はパートナーで行くものだという何かがありましたよね。

委　　員：そうなのですかね。

委　　員：そうなのですよ。ある程度２人で行くのか定番だみたいな考え方があったのだと思うのです。でも、産後はやはり何か。

副 会 長：やはり軽い義務感は大事ですよね。

委　　員：軽い義務感、そうですよね。

委　　員：行かなければいけないらしいかなみたいな。

委　　員：そうなのですよね。

委　　員：産後しばらくはやはり女性でしかできないことがありますから、それを過ぎていくと、１年たつと父親も来るのではないですかね。うまく誘導してあげれば。

委　　員：３、４か月検診とかの検診とかも、やはりママはどうにか何の用事があっても都合をつけて行かなければいけないみたいなところがあるではないですか。そこまでの強制力はなくても、少しこの時期はパパと子どもで子ども家庭支援センターに来てねみたいな、ちょっとだけそういうのがあるといいのではないかな。

委　　員：さっき委員がおっしゃっていたように、どうしても女性でないとできないことというのはありますよね。要するに出産前後とか。なので、男性の抱え方というか子育てというのもあるのですけれども、妻を、ママである人を支えるというのも１つの役割としてある。もしかしたら、産前・産後辺りは、子育て支援の中にパートナーを支えるという役割を入れてみてもいいのかなと今の議論で感じました。

委　　員：親子ひろばのイメージは、ママと子どもで行くみたいなイメージがすごく強くなっているような気がしていて、例えば土日の昼間とかはやっていますか。

委　　員：やっていますよ。

委　　員：今やっていますか。

委　　員：はい。

委　　員：でも、なぜですかね。何でかママと子どもと行くものだよねみたいなイメージがすごく強くて。

委　　員：やはりそういうのがあるから、お父さんも来られるようなイベントを結構どこのひろばもそうなのですけど考えて、チラシを打ったり広報したりというので来てもらえるように努力はしているつもりなのですけれども、なかなか、親子ひろばの「親子」はパパもママもですし、あとおじいちゃん、おばあちゃんとか保護者はいろいろ方がいらっしゃるから、その辺が伝わらないですかね。

委　　員：出来上がっているところに入っていくのは勇気が要りますよね。

委　　員：そうなのですよね。自分もそういえば行った記憶がないなと思って。親子ひろばは行った記憶がないなと思って。でも、何でなのだろうと。でも、そんなにうちの妻も連れて行っていたのかというとそんなこともなかったような気もしていて。

委　　員：確かに私もママですけれども、子ども家庭支援センターに産後なかなか行けなかったのですよ。やはり地域とつながるということが、ある意味ちょっとハードルが高い時期。毎日自分がボロボロなのに人と会わなければいけないのかという、そういうちょっとハードルになっていたりもする人もいるのですよ。パパママ関係なく。

委　　員：親子ひろばとかに行く方というのは、もう保育園に入園してしまったらあまり行かないものですか。

委　　員：正直、毎日平日は保育園に行かれるので。ただ、土曜日とかにやっていると、保育園に行っていてこのぐらい成長したよとか、久しぶりに遊びに来ましたという方が多いです。

委　　員：それは親子ひろばの経験がある方ですよね、多分ね。

委　　員：そうですね。

委　　員：私はこの間まで育休を取っていて８月の末に復帰したのですけれども、育休期間に奥さんが下の子の面倒を見ている間、上の子をほぼ毎日ぶんちっちに連れて来ていたのですけど、復帰してからほとんど来ていなくて。だから、それは心理的な行きやすさ、行きにくさは、自分は多分相当行きやすいパパだと思うのですけど、それでも土曜日休みだけどほとんど、１回も来ていないのかもしれないのです。本当にぶんちっちまつりで来たくらいで、何をしていたのだろうなと今、予定を見ていますけど、やはり買い物に行ったりとか髪の毛を切りに行ったりとか、土曜日に仕事が入ったりとか何かいろいろ。スケジュール的にももうちょっと行けそうだけど行けていないなとか。公園に遊びに行ったりとか奥さんの用事について行ったりとかしているのです。

　そう思うと、あんなに来ていた自分が働き出すとこんなに来ないということは、ちょっと示唆的な感じだなと思って。いろいろ自分でもうまく分からないけれども、とにかく行く選択肢が相当下のほうになるというか、ほかのものが上に上がってくるみたいな感じなのかな。そういう気がします。やはり広いところで歩けるように、上の子が２歳を超えたというのもあるのですけど、公園とかに行ったりとか、奥さんを送って行った近くのところで遊んで待っていたりとか、そういう時間の使い方が多かったりはします。

委　　員：保育園に行き出してしまうと、もうそこでつながりを見つけて保護者同士で相談し合ったり、何かあったら保育士さんにお話ができてしまったりするから、なかなか話をしに来ることはなくなってしまうかなと思うのですよね。あと、お母さんと来るものだという刷り込みがあるというのも、私たちがそもそも母親に育てられてきたからそういう刷り込みもあるのかなと思って。ということは、私たちが育てている子どもの世代をお父さんと一緒に育てないと、私たちの子どもまでも母が育てるものだという刷り込みを持って育ってしまって、その次の世代にまたそういう刷り込みが続いていってしまうのかなと。

委　　員：私の話の続きなのですけれども、保育園に入れると、お母さんも平日働いているのですよ。それは、私が今、育休から明けて復帰して働き出しているのと似ているのかなと思うのですけど、保育園に通わせて平日働いてらっしゃるお母さんが、土曜日にぶんちっちに来るのは何でなのでしょう。何かその気持ちとお父さんの気持ちと似ているというか、境遇は一番近いのかなと思ったのです。保育園に行っていて平日働いているお母さんが、土曜日にぶんちっちに連れて

くるところにどんなメリットを感じていて、むしろお父さんはそういうメリットを同じように感じるのかなと思ったのですが、聞いたりしますか。

委　　員：まあまあ来ていますよね。

委　　員：まあまあいますよね。

委　　員：利用されている方の話だと、やはり家で２人で子どもを見ていると煮詰まるのですよね。だから、もう家に２人でいるよりは、ちょっともうどこかに出てしまったほう自分も気が楽だしというのでという方もいる、それと、平日の仕事も疲れて出たくないとか、家事をやらなければいけないのとどっちが勝つかというところなのかな。お父さんが休みの人は、お母さんも家にいてお母さんが子どものことをやっていたりすると、そうする理由がないですよね。子どもを連れて外に出なければいけない切迫感がないから。

委　　員：どうなのでしょう。私は土曜日に奥さんが出て行って子どもが２人家にいるということはあるのですけれども、ぶんちっちに行こうと思わなかったり、何か別のことをしてしまう、子どもを車に乗せてどこかに買い物に行ってしまおうとか、あれを済ませておきたいなみたいに思ったりしてしまうのですけど、どうなのでしょうか。

事 務 局：平日仕事されていて土曜日にいらっしゃるお母さんがいますよという話しされていましたけど。

委　　員：そうですね。今の保育園に平日行っていて土曜日に来てくれるママだったら、そんなに毎回毎回ではないのですけれども、来てくれたときにするお話というのはまず子どもの成長の話と、あと若干発達とかを考えたりしたときになかなかストレートに保育士の先生に聞けないときにどうですかねみたいな感じで。昔を知っているから、うちの子どうですかねというのを聞きに来られる方もいるし、あとはパパとの話。ちょっと苦情ではないけど、ちょっとパパと意見が合わなくてこういうのでけんかをしてとかというのをわざわざ言いに来てくれる人もいれば、あとはお父さんが今、家で掃除をしているから子どもを連れて久しぶりに遊びに来ましたといってそういうので出てくる方もいるので。ただ、それがパパに当てはまるかというと。そこまで行くのに、たった１年未満のお付き合いだけれどもそれだけの信頼関係ができているから来てくれてそういう話をするというのは大きいとは思います。パパとそこまでできるかというと、やはりかなりの回数来ていただかないと、お父さんが打ち解けるというのは。それが、きっかけがパパトーキングだったり、プレママ・プレパパの講座で、その先に親子ひろばがあって、そして、その先にまた保育園に行かれて小学校でまた会いましょうねとか、どんどんつながっていけるようなものが地域というものになるのかなと思います。

副 会 長：土曜日に子どもと家にいてつまらないというか、困り感のないお父さんは無理に引っ張り出す必要もないのかなとは逆に思っていて、逆にそこで困り感を持っている人は来ていいのだよというか。

会　　長：外に行ったほうが楽ですよね。

委　　員：そうですかね。

会　　長：自分の家で。

委　　員：公園とかで後ろについて行っていたほうが、まだ楽。ぶんちっちだとおままごとの相手をしなければいけないから。そういうのももしかしたら。考えたことがなかったですけれどあるのかな。だから、公園が楽なのかな。

副 会 長：どっちもフラットに選べるくらいの感覚で、今日はこっちに行こうとか、今日は自分たちでここでいいやと。それが大分、差が。こっちに行くというハードルが。そのハードルを下げるために何をするかということ。

委　　員：でも、キーワードはやはり困り感ではないですかね。何か困っているというものを持っていらっしゃる方は、保育園に預けていたとしても土日ぶんちっちに相談してみようかみたいな、そういう動機づけはもっと強いのではないかなと思います。確かに、土日というのは子どもがずっと家にいると手詰まり感もあるし、外に出たいとそもそも言いますからどこかに連れて行ってしまうのですよね。そこで何も困っていなければ多分親子ひろばとかには来ないのだと思うのですよ。公園に連れて行ってしまうとか。分からないですよ。でも、そこで選んでもらえたらそれはいい話ですけど、何か困り感のある人は来そうかなと。

会　　長：保育園で、あるいは幼稚園で、父親同士というのはどうやってつながりますか。あるいはつながっていないか。

委　　員：保護者会があって、そこでつながったりというところですかね。保育園の保護者会の役員とかをやることになって、それで、うちは最初の子どものときは全然保育園に入っても右も左も分からない状態で、役員を募っているのですけど誰も手を挙げなくてかわいそうだからというのでかみさんが手を挙げたのがきっかけで、それでそういう先輩のパパとかと仲よくなったというところで、それつながりでつながっている人はやはり多いですね。ただ、保護者会が今ない保育園が大分増えていて、保護者会があると保育園に入園したくないという方もかなりいるみたいで、今通っている保育園は今年で保護者会は休会になってしまっているので、そうなってくるとどうやって関わるのかなというのはちょっと、どうするのだろうと思います。

会　　長：保護者会はネガティブな評価になるみたいです。面倒くさいという。

委　　員：面倒くさいというネガティブな評価になっていますね。

委　　員：ＰＴＡもそうですね。

会　　長：義務感だけが先にあるというか、負担感というか。実際やってみるとそうではないのだろうけど、そうではないところもあるだろうけれども。

委　　員：うちは、今、小学校６年生の子どももいるので、ＰＴＡとかもやっていたのですけど、ＰＴＡのほうがやはりトラブルが多いです。

会　　長：深く頷いてらっしゃいます。

委　　員：確かにＰＴＡはトラブルが多いし面倒だしやりたい人がいなくて、本当になくなりそうなのですけれども、なくなっている学校も多いのですが、でも、やったらやったでやってよかったなということも結構あって、それを知ってしまった人は次の年もやってくれたりします。

委　　員：あと、子ども同士のトラブルとかもやはり小学校になると増えてくるので、そういうので今、結構上の子の学年は、子どもの学校の中でトラブルを起こしている子とかもいつつ、その保護者同士で関わらないといけないというところで、ちょっと何か難しいなと思いますね。うちは国分寺九小なのですけど、九小ではバンドというＳＮＳというＬＩＮＥみたいなツールがあって、そこに保護者が基本的にログインして使っているのですけれども、チャットのやり取りでもめたりということもあって、それでちょっとどうなのだろうなと。チャットだと意図が全然伝わらなかったりとかするというのもあって。

委　　員：地域組織化はサークルづくりとかグループづくりというイメージとおっしゃっていたのですけれども、形があるとやはりハードルが上がってしまうので、もうちょっと緩やかなつながりみたいな。つながりをかちっとせず緩やかにしていったほうが、もしかしたらいいのかもしれないなとなっているかもしれないです。

会　　長：今、委員がおっしゃっていただいたように、私もちょっとさっきから考えていたのが、子ども家庭支援センターが全部主催でなくてもいいのかなというのが率直な思いで、いろいろな活動があるではないですか。福祉のイメージしか私はあまりないのですけれども、こども食堂だとか学習会だとか、あるいは学童もそうだし、放課後子ども教室もそうだし、何かイベントをそれぞれでやるではないですか。そこで一芸を持っている人の活躍の場を提供するとか、あるいはご飯を食べに来ませんかくらいの体で、今日はお父さん方中心の日とか少し手伝ってもらうとか、何か既存のものに共催的な形で関与をして、そこでつながりを作っていくとかそういったこともあり得るのかな。そっちのほうが恐らくネットワークは広いだろうし。

　率直に地域組織化と言った場合に、地域生活はそもそもそんなに意識をすることというのがないというか、子どもが生まれて小学校区とかというのが感覚として出てくるので。私は引っ越して生まれたところから遠く離れて、地域というものが、子どもが生まれてようやく地域というのはつながりがあるのだなというのを認識したような状況なので、そもそも地域というものがある。そこに出会っていく、そこからいろいろなつながりとかネットワークが出てくるのだろうなと。

私の今の引っ越した先でつながってきたのが、犬です。子どもがいて、犬が周りにいっぱいいて、散歩している人がいて、大きくてビビっている。でも興味があるからちょっと行ってみたいというので、その飼い主さんとつながっているというか顔見知りになったりするのです。そういうので、何か預けるとまではいかないけれどもいるのだよということはお互いに認識してもらえているような状況が今ようやくできてきて、それだけでもありがたいなとは思うのだけれども、そういう具体的な獲得物をどこに置くのかというのもそうだし、どのエリアで、国分寺市というとさすがに大き過ぎるので、幾つかの小学校区、あるいは中学校区とかそういうエリア単位を考えてもいいし、恐らく社協でもそれなりのネットワークがあるので、そこに少し間借りするような形で父親とのつながりを作っていく。ゼロからよりも大分楽だと思うのです。

あとは発信のツールとしても、名称はともかくとして、少なくとも子育て世帯にはつながりが広がりつつあるのですよね。母子モは。普及率は上がってきていると。そこは自信があるそうです。父親がやるところまでというのはあれですが、そういうツールを拡張していくというのも十分検討の余地があるだろうし。

親子ひろばは、資料８－２だと１割満たないですよね。7.5%だそうです、父親の参加率。それでも、平成 29 年が 3.5%で少しずつ上がってきているような状況で、それなりの育児の参加率と、少し遅れてのひろば参加率の普及みたいなものもあるのかもしれないです。

委　　員：ひろばは１週間あるので、土曜日だけとかを見たらもうちょっと。

会　　長：高いかもしれないですね。

委　　員：半々とか４割ぐらい。

事 務 局：もしかしたらそうかもしれませんね。

委　　員：ひろばの後に懇親会とかやらないのですか。パパだけ懇親会行きましょうと。それは既存の仕組みを使って、延長でできるのではないですか。

委　　員：子どもを連れてきてしまうから。

委　　員：それはね。だから、両親で来ていたらお母さんが連れて帰ってと言って。それは駄目か。

委　　員：多分 30 分ぐらい早めにお母さんが帰ろうと言い出して、そのまま参加しないで全員で帰れるようにするのではないですか、そんなことがあったら。お父さんがあっちに参加したがるから、30 分早めに帰りますという親が増えそうですね。

会　　長：ひろばはお昼をまたぐのですか。

委　　員：はい。今年度から通しになりました。

会　　長：じゃあ、ランチ会みたいなもの。

委　　員：ランチ会というか、子どもが一緒に来ているので、それこそその子の状況に合わせて、じゃあ今からお昼食べますとか、じゃあ一緒に食べたらとかそういうのはしています。一時保育とかも組み込まれると、そういう今おっしゃったような、じゃあパパの会にしましょうといって、子どもは一時保育が今日はありますとかするほうが、もしかしたらゆっくりお話できるかもしれないです。ただ、なかなか親子ひろば事業で一時預かりというのはハードルが。うちのほうでも提案はしたのですけれども、なかなか現実的には難しいです。

会　　長：ただ、私の感覚からすると、子どもがいたほうが話が振りやすいというか広がりやすい感覚があるので、完全に区分をするとおやじだけの空間だと何か私はしんどい気がします。どうですか。つながりができていれば違うのでしょうけど。

委　　員：子どもが一緒だと、子どものほうにやはり目が向いてしまうから。

委　　員：本音をしゃべれないですよね。

委　　員：やはりみんな別にじっとして本を読んでいるわけではないではないですか。何かちょっと気になってしまってとか。多分子どものほうから一緒に遊ぼうよとか、本読んでとか言って、話の途中だけど呼ばれてしまった、引っ張られてしまったからというほうが多そうかなと思います。

委　　員：確かに、子どもが近くにいて話も聞きながらほかのママとも話すみたいなことができるのは女性特有なのかなという感じはあるかもしれないです。パパが来て、ここしか見ていないのにほかのことは入ってこなさそうな感じはします。

委　　員：でも、おじさんだけで集まっても。自分は割とお話しするのが好きだし、親子ひろばは、「子どもが行っちゃったから、じゃあね」というのがすごく頻繁にあるから、当たり前なのかなという気もするのですけど、かえっておじさんだけで集まってもなと。それこそ何かテーマがないと持たない気もします。

委　　員：そこで何かそういうのがあまり関係なく外部で仕切ってくれる人が、その輪の中に多分いると進むと思うのですよ。

委　　員：今のパパトーキングというやつはそんな感じですか。

事 務 局：そうです。

会　　長：ファシリテーターがいる。

事 務 局：はい。

委　　員：本当に獲得物があるような講座。パートナーシップについてとか子育ての何とかというのを聞くということだったら、子どもがいなくてもそのために来るパパも多いかもしれないですね。フリートークは確かにちょっと厳しいそうですよね。

委　　員：地域とつながることの最大級のメリットは、やはり災害時だと思っていて、何かあったときに周りの人と助け合わなければいけないことというのは多いではないですか。例えば大雪が降っただけでも雪かきをしていたら周りの人と「す

ごく降りましたね」とかと言って仲よくなってしまったりするし、うちの子は二小に通っていたのですけれど、そのときに地区班というのが当時あって、そのエリアそのエリアで班を分けて、集団登校のとき集団下校のときはその人たちと一緒に帰ります。災害が起こって保護者が迎えに来られなかった人は地区班のお友だちのお家で一緒に待っていてくださいねと入学したときに言われて、びっくりしたのですよ。「えっ、人様の家で待つんだ、学校で保護してくれないんだ」と。そうかと思って、仲よくなっておかないとまずいなと。これは何とかしなければいけないのだなというのは、そのときすごく実感しました。やはり隣近所に顔なじみを増やしておくと、常日頃から子どもが危ないことをしていたよとか、学校に行く途中で公園で遊んでいたよとか、行く途中はやめなよみたいなことも全部情報が入ってきたりするし、平時だけではなくて何か起こったときにすごく助けになってくれた覚えがあるので。避難所に行きました、家族だけだと不安だけれども知っている人がいっぱいいますだったら安心が強いし、うちでこれが足りなくなってしまった、子どものおむつが足りなくなってしまった、そうしたら１枚あげるよと言ってもらえたりとか、本当にささいなことだけれど、すごくそれを感じながら育ってきたので、そういうメリットとか知らない人もいるのではないかなと思うのですよね。

委　　員：ちょっとふわっとしたことでもいいですか。地域とつながりたいと思うのは、特に私ぐらい前期の高齢者になってしまうと地域とつながりたいと思うのですよ。退職はまだしていないですけれども退職して、会社から離れてしまうと、やはり地域の周りの人と何か、遠くに出かけなくてもね。そこで僕が考えてやっているのは、日本山岳会の東京多摩支部というところ。この辺ですよ。みんな近くなので目的もはっきりしているし、組織もあるし、いついつ誰がやるよというリーダーもいるし、そういうところでつながるとすごく楽しいし、ここもそうなのですけれども、国分寺の方とやはりいろいろな問題を話し合いたいということもあるのです。特に年を取るとそういうことになる。

　若いときはやはり子育てのことでつながっていたほうがおっしゃるとおりいいのだと思うのですよね。その関係というのはずっと続く場合もあるし、続いているし、私の場合はようちえんから小学校だったのですけど、そこの仲間というのはパパ同士でつながっていますし、この間も一緒に飲みに行きましたし、そういう安心感というかね。根っこにあるのは孤立を防ぎたいというか孤独を何とかしたいとか、あるいは困ったときに助けてほしいとか、何かを共有したいとか、何かそういう感情が根っこにやはりある。それが会社なり何なり仕事と縁が切れた途端にやはり地域に戻るというか、地域から始まるというか地域に戻っていくというか、そういう循環をうまく利用できないかなと。ごめんなさいね。すごく漠っとした話なので、直接的には関係ないと思うのですけれども。

副 会 長：それこそ子育て世帯が集まるときに、ある意味世代を超えた方がそれこそパパトーキングにゲスト出演というか行っていただいて、今のようなずっとつながるかもしれないつながりがあるかもしれないとか、そういうことの大事さみたいなことの経験を語っていただいたりというのは、そういうものも役に立つのかなというか、今だけではないという。

会　　長：山登りというと、子どもを連れて行けないかもしれない。行きづらそうですけれど。

委　　員：子どもとは一緒に富士山に最初に登って、以降彼らも登っていますよ。

会　　長：そのお話を聞いてイメージしたのが、企業の地域貢献というのが今いろいろ出てきているではないですか。うちの大学でも、昔ＦＣ東京か何かの選手が来て、子どもにサッカー教室みたいなのをやるとかというのがあって、それにうちの子どものスポーツの担当教員が乗って講座みたいなのをやったりしたので、そういうのに乗っていくのもありかなと。父親に呼びかけて一緒にやろうとか。そうすると、地域ではなくてスポーツというところでつながってもいくこともできるし、もちろん国分寺の一定エリアを絞るわけですけれども、さっきスポーツの初心者体験とかいろいろお話があったので、そういったところもあるのかなと。

　ネタはそれなりにありそうだ、そこでどういうものを獲得したいかというのをもう少し明確にしてつながる、で、その先に何を見越すか。冒頭の話に戻りますけれども、産後うつの予防というと何か面白みに欠けるというか、うつ予防に行きませんかと言うと多分来ないですよね。虐待予防というと何か恐ろしそうなイメージを持たれそうなので、もう少し最初のほうにありましたキャッチーなアプローチの仕方というのも考えなければいけないし、じゃあそこで何を打ち出していくのかというのも整理していかなければいけない。幾つか今日お話を聞く中で、いろいろなアプローチの仕方もあるし、そんなにネタがなさそうではないが、それをどう整理できるかというのがちょっと難しそうですね。

委　　員：あわよくば、これさえ見ておけば大丈夫とか、これがスマホのアプリだったら、このアプリさえ見ておけば国分寺のイベントは安心して探せるとか、自分にぴったりなものを提案してくれるとか条件を絞って検索できるとか、何かそういうのがあると整理はしやすいですよね。すごくたくさんある状況で。

会　　長：たまにネットに聞くのですけど、「何年何月のイベント　国分寺市」とか「立川市」とかと入れると、祭りとか産業まつりとかいろいろなカレンダーに載っているのが出てきたりするので、そういうのができると面白いのかなと思ったりします。実際に行ったこともあるし。

委　　員：いろいろな資源を活用しながらというお話が出たのですけれども、市に出す答申ということでこれをぜひ載せてほしいということがあるのですけど、物的環

境というのでしょうか、設備面のこと。子ども家庭支援センターに当てはまらないかもしれないのですが、やはり出かけた先で男性が子育てしやすい設備を市内に整えてほしいなと実感することがあって、ひかりプラザに期日前投票で夫婦で行ったときに、１歳の双子を連れて行ったのですけれども、帰りに双子なので１人ずつおむつ替えして帰ろうかというので１人ずつ連れてトイレに行ったのです。私が１人替えて出てきたら、夫が１人抱っこをして待っていて、もう早かったねとか言ったら、男子トイレにおむつ替え台がなかったと言われてすごく落ち込んで、本人はやる気もあるし、日頃からやっていることなのに、その設備１つでその機会が奪われてしまって。私は、ちょっと大げさかもしれないですけれども、あなたがおむつ替えしなさいよという市からの暗黙のメッセージを受けたのですね。何かそういう物的なことは暗黙のメッセージにもなり得ると思うので。市内の建物というのは結構古い何十年も前に建てられたものだなというような建物が多いので、建替えを待たずしてそういう設備はどんどん整えていってほしいなと思います。おむつ交換台だけではなくて、例えば授乳室も、直後で母乳をあげるのだったら女性しか入れないスペースがあるのは当然なのですけれども、調乳用スペースだったりミルクで授乳とかは男性とかでもできるパパも、できるというか日常的にしている方もたくさんいらっしゃると思うので、男性が入りやすい雰囲気を作ったりとか、そういう設備面なんかも整えていただけるといいかなと思いました。以上です。

会　　長：商業施設に行くと、最近できたのは大体男性側にもありますよね。

委　　員：そうなのです。赤ちゃんスペースが充実していたりすると、やはり市の施設よりもそっちのショッピングモールに行こうかという選択をすることに意識がなっている、そういうきっかけにもなり得ると思うので、そこに力を入れていただけたらいいなと思います。

会　　長：確かに。あそこには男性側になかったなと思う場所も確かにあって、そこには確かに行っていないなと。あと、何か取ってつけたようなところにあって、ここで替えさせるのはちょっとまずいだろうというのもあったりします。

委　　員：恋ヶ窪に新しくできる施設は、きっとバッチリですね。

会　　長：何かできるのですか。

委　　員：市役所が移るので、跡地に新しい図書館とか。

委　　員：恋ヶ窪が国分寺の中心だというのはそういう意味ですか。

委　　員：市役所のほんの近くなのですけど、何ができるのだろうと。あの駅が寂れるのではないかなと思うのですよ。

委　　員：ガラス張りのいいのが建ちますよ。

委　　員：それがあまり意見が反映されていない。

委　　員：されていないですよね。何も知らないもの。

委　　員：何が欲しいですか。

委　　員：アンケートを取ってくれたらしいのですけれども、近所の商店街くらいまでしか取っていなくて、九小が近いから、そのときにＰＴＡが一応市の人とも話はしたのですけど、その要望が受け入れられたかどうかはちょっと分からないという。

委　　員：どんな要望をしたのか気になりますね。

委　　員：例えばあの辺は児童館が西国分寺駅まで行かないとないので、子どもがいられる場所を作ってほしいという要望とかは出しているのです、小学校のＰＴＡのほうで。ただ、結構もうパブリック・コメントを締め切る直前とか、締め切ったそのぐらいだったので、それがどうなるかというのはちょっと分からなくて、市との話合いに参加した人たちの意見を聞いていると、あまり期待できないのではないかなみたいな感想だったので、ちょっと何とも言えないです。ただ、図書館とかは移設するのですよね。

会　　長：この課題（１）の①から⑩までというのは、基本的に今まで出していただいたことをそこにまとめていますけれども、問題はこの（２）辺りですね。この区分の仕方とかね。どうするかな。

　前回までの議論を踏まえて、今、子育てに関心があるかないかというところで区分をしてもらっていますけど、こういう出し方でいいのか、あるいはもう少し獲得物で区分けをしていく、つながるというのか、あるいは地域とのつながりとか、あるいは育児の技術といったら何ですけれども、おむつ替えとか離乳食とかそういう技能的なものとか、そういう獲得物で提起をしていくものなのか、どういう区分がいいかな。さっき困難度というのもありました。

委　　員：私はこれを最初に見たときに、一番右端の「子育てがなくあまり関わっていない人」というので、私は小学校の教員をしているのですけど、学習に関心がない子がクラスに絶対いるのですけれども、その関心がないとか興味がないみたいな子たちにどうやって興味を持たせるかみたいな、どうやって勉強させるかみたいなことを考えていくと、どうしても不登校が増えてしまうのです。直接的にその子が不登校になるというよりは、そういう空気がある学校にいにくくなるみたいな。あまり関心を待たせよう待たせようみたいな方向ではないほうがいいのではないのかなと。右から２番目の「関心はややあるがどうしてよいか分からない人」にはすごく助かると思うのですけど、あまり父親も子育てに関心を持つべきだみたいな、今そういう風潮ですけれども、持つとこんないいことがあるよみたいなそういう雰囲気だと、かえってどっかにひずみが出てくるのでないかなという気はしているので、そこはちょっとあまりグイグイいかないほうがいいのかなという気はします。

副 会 長：そういう意味で言うと、初めに産後うつという言葉からスタートしていますけれども、関心があるが困り感を持っている人についてどうつながりやすくするかというのが、今日のお話合いのいろいろな支援がテーマだったのかなと思っ

ていて、そこがメインというか第１の主題になるのかなと思ってはいます。あとは、本当に関心がないという人は、ゼロの人はいないのでしょうが、なかなかほかの仕事だったり優先順位の関係でそうやって子育て関与に意識の向かないお父さん、それでちょっと周りが困っているという、そこに触れるのか触れないのか。触れるとして、少なくともプレパパ・プレママの時代は一緒に来ているみたいなお話なので、そこから、さっき言われたようにお母さんをどう支えるかみたいな、支援も必要だみたいな簡単な触れ方で終えるのかとか。

委　　員：父親支援という目標ではあるのですけど、あまり父親支援を推していくと、前提として父親が家のこと、育児とか家事をやっていないとかやり方が分からないと言っているようなものになってしまうかなと思うので、あくまでも、多分私たちがこれから未来で作り上げていきたいものは夫婦のパートナーシップとして夫婦でどうやって育児と仕事をやっていくかという話だと思うので、パートナーシップというのを夫婦でどうやっていくかというところを打ち出したチラシであったり、そのほうがいいのかなと思いました。父親がと言ってしまうと、ちょっと反発も出てきてしまったりするのかな。

会　　長：難しいな。

委　　員：これに掲げている目標というのは、やはり私たちの中で共有しておいて、でも打ち出すものというのはちょっと表現としては違ってもいいのかなと。その目的を達成するためにという感じがあるのですけど。

会　　長：ただ、これは市に対する答申なので、ぼかしすぎると伝わらないというか事務局が苦労するというか、頑張って伝えていただくしかなくなってしまうので、やはり答申を出す上ではあくまでも市長に対してのメッセージを出すので、どこまで抽象的な表現と明確化のバランスを取るのかというのはなかなか難しいところかと思います。

副 会 長：今日出たような具体的な方策は、それこそ目的をはっきりさせるとかチラシの打ち出し方とかそういうのは明確に書いて、そこで何を目指すかとのところは少し今の意見を踏まえて、それで目指すべきは父親支援オンリーではなくてという。子育ての地域でのしやすさ、子どもがすくすく育っていける環境づくり。

委　　員：これはちょっと共有認識しておいたほうがいいと思うのですけれども、最後の「子育てに関する悩みは子どもの年齢に限らず」という記載があって、ここでは１歳になるまでが一番多いですよということが書かれている状況下で、支援するときというのは、支援の対象になる父親というのは子どもの年齢によってやはり変わっていくのかなというのがまずあるかなと思って、そこで子どもの年齢がどのくらいまでの父親に対して支援をするのかというのははっきりさせておいたほうがいいのかなと思っているのです。ちなみに、今の共通の話だと、多分小学校就学前ぐらいの父親に対してかなという認識なのですけれども、そこはそういう認識でいいのですか。

会　　長：一応、課の対象としてはゼロから18歳までというのがうたい文句で、ただ前回の親子ひろば等については、やはり就学前で一定ポイントが絞られていたかなと思いますけれども、今回はいかがでしょうか。特に縛りはないのか、あるいは一定年齢の想定があるのか。

事 務 局：今回答申を作らせていただいたところ、皆さんのご意見の中でやはりお困り感というところと、あとステージが変わることによってつながり方。多分小学校だとＰＴＡとかの活動だったりとか、保育園に入れば保育園の親御さん同士のつながりといういろいろなステージがある中で、じゃあどこを特にフォローしていったらいいのかというところで、今回子育てが不慣れなところにスポットを当てて、そこに支援をしていくことによってその次のステージに行ったときに困らないように体制を整えていくというのもありなのかなということで、未就学児童ということで整理しているところですので、皆さんからご意見を頂ければと思っております。

会　　長：スタート地点でうまくいけばその後もというイメージですかね。１歳となるとかなり期間が短いですよね。

事 務 局：ですので、未就学児童まで広げてもいいのかなと。どこで父親が関わりに入っていくのかというのはあるのかなと思います。子どもが成長する中で、特に未就学児童というのは心身の発達や成長が著しい時期。そうすると、つまずきポイントというのは、１歳までもそうですが、次はいやいや期が来たりなど、いろいろなステージの中であるのかなと考え、そこを特にという形でスポットを置かせていただいております。

副 会 長：現状のパパトーキングというのは、終期というか上限があるのでしたか。

事 務 局：いえ。特にないです。ただ、親子ひろばを利用されている方が参加することが多いので、やはり未就学児童の方が多いと状況です。

副 会 長：現状ではそうなっている。

事 務 局：はい。

副 会 長：メインはそこなのかなと思いつつ、何となく終期をばしっと切ってしまうことも今までのことを見るともったいないかなという感じがするのです。この答申の範囲をここまでの支援の話であると完全に切ってしまうと。メインの心情的にはそこだけれども。

会　　長：就学前後を含めて、すこし幅を持たせてもいいのかなというのがイメージです。小学校への移行期ということですね。学区というのが出てくるので、うちは学区が関係ない保育園に行っているので、学区に移行するときになかなか往生しましたけれども。そういう移行を含めて、少し幅を広げておいてもいいかもしれないですね。

　あと、今回の諮問のテーマが「子ども家庭支援センター地域組織化事業における父親支援の取組について」ですよね。ですので、この諮問タイトルに対

してこちらがどう提起をするかというところで、先ほどのご意見からすると、父親を全面に出し過ぎないで、ただ、父親を意識した書き方というところでどうできるかなと。産後うつという書き方はちょっとあれですけれども、子ども家庭支援センターの対象が、地域の一応全家庭でいいのですよね。なので、全人口支援というのがなじみがないですよね。ポピュレーションアプローチ、何だそれという感じですよね。多分、社会的擁護の人たちは分かるのですけど、一応、全人口対策というそうなのですけれども。そういうイメージで、全ての子育て世帯の支援をしたい、ついてはこれまでなかなかアプローチのできなかったところでの諮問として受け止めたというくらいにして、父親父親というのはあまり出し過ぎない、父親というのをあまり出しすぎないけれども意識をすると。これは難しいですね。

委　　員：育児休暇を最近取られる方が本当に増えているので、育児休暇を取られたお父さん向けみたいな、一旦の第１段階としてはそういう打ち出し方を。それだと、別に否定もしていないし、育児を協力するつもりで育児休暇を取っている方たちだから関心はあるがどうしていいかよく分からない人に対象は絞られるのかなとも思うし、第１段階としてこれをやって就学前まで広がっていくイメージとかはどうかなと思ったのですよね。ゼロから就学前までのお父さんたちを一挙に集めるのは、ちょっとチラシもどう作っていいか分からないし、誰に効くものを作れるかも分からないところがあるので、タイムリーに来るのは育児休暇を取得したお父さんたち向け、そうすると親子ひろばにも通いやすい時期ではあるのかなと思ったりもしたのですが。

委　　員：土曜日ではなくて平日でもいいのですよね。

事 務 局：そうなのですよね。

委　　員：私は育児休業を取ったことがないので、唯一取ったのが有給を使って２週間とかだったので、育児休業を取っているときの１日の過ごし方みたいなのというのは、何かこういう過ごし方があるよとか、こういう過ごし方をすると楽しいよとか、そういう紹介というのは案として１つあるのかなと思いました。

会　　長：そういうプレパパ・プレママの段階でそういう情報があると、そういうのも選択肢としてあるのだと。実際どうでしたか。

委　　員：ぶんちっちが開く時間にぶんちっちに来て、ぶんちっちが閉まる時間にぶんちっちから帰る。以上です。基本本当にそういう生活でした。結局、買い物に行くとかを土日にするのは変わらずに、ただ平日子どもと過ごすという感じで。毎日開いていると、例えば今日はどこの公園に行こうとか、毎日が特別になるわけではないから、今のぶんちっちに行ってぶんちっちから帰るというのを当たり前の生活にして、結局お出かけは土日だけとかだった感じかなと思います。行っても行かなくてもいいというのが仕事との違いなので、それはすごく気持

ちは楽だし、子どもの調子にも合わせて考えるのですけれども、来ておけば間違いないという感じでした。すみません、面白くなくて。

会　　長：でも、本当に何気ない日々ですよね。

委　　員：そうそう。それが日常というか。

委　　員：答申の内容として、前回課題をみんなで具体的に出し合ってすごく具体的にまとめていただいたので、これに対する対応策というのは、今いっぱい出たものを、この書いていただいた文言でもすごく抽象的なので、具体的に市に対する要望というか市民としては具体的にそれに対応する対策をお伝えしたいという気持ちがあります。最終的にパパだけに区切らずに、パートナーシップという言葉があったように、家族の方やパートナーと協力してどう育児をうまく進めていくかというのが最終的な課題というのは伝えて、ちょっと抽象的な書き方でもいいのかなと思うのですけれども、やはり利用者としては具体的な対策もいっぱい盛り込んでほしいなと思います。

副 会 長：今までやってもらったからというところは事業にあるかなと。

会　　長：書き方として、価値観というよりも現状的に育休を取る男性が増えてきているので、そこに対する支援も今後より考えていかなければいけないから提案をするというような感じで、鏡文というか頭を作って、父親がすべきというよりもそういう現状だからやろうということで受け止めたと提示をしておいて、課題があり。前期のときに、いろいろ具体的な意見があった後にポイントをまとめたような答申のつくりだったですかね。そういうのでもいいのか、逆に今回はそういうことをすると散漫になるというか、ピンポイントのほうがいいのか。例示ぐらい出しておいても、こういうイメージで我々は提示しているのだよというのはあっていいかなと思います。柱となるのは、現状のパパトーキングをどうするかというところだけではなかったと認識をしているので。でも、この現状のものと新規の取組というのを少し、現状の補強ともう少し展開してほしいところということで。最後の末尾のところで、なお、今回対象にしていないけれどもこういったことも考えていかなければいけないし、ゆくゆくは父親だけではなくてというところも、最後のほうにまとめていくようなイメージですかね。ざっくりと答申案の構成としては、そういった感じで展開するということでよろしいですか。

――了――